

## 親鸞聖人と関東の門弟

大谷大学名誉教授 草野顯之

## 【目次】

はじめに

- 一、関東の門弟とは
  - 二、消息を通じての教化
  - 三、聖教の執筆・書写と送付
  - 四、門弟からの懇志
  - 五、上洛する門弟たち
  - 六、逗留する門弟たち
- おりに

【親鸞聖人略年譜】  
(和暦) (西暦) (年齢)

承安	三	一一七三	一
建和	元	一一八一	九
建仁	元	一一八〇	一
承元	元	一一九〇	七
建暦	二	一一九一	三五
建保	元	一一九二	三九
建長	長	一一九三	八〇
弘	一	一一九四	四二
二	一一九五	一一九六	二二
三	一一九六	一一九七	二二
四	一一九七	一一九八	二二
五	一一九八	一一九九	二二
六	一一九九	一一一〇	二二
七	一一一〇	一一一〇	二二
八	一一一〇	一一一〇	二二
九	一一一〇	一一一〇	二二
〇	一一一〇	一一一〇	二二

## (事項)

この年に誕生(一説に、四月一日)。

春、慈円のもとで出家し、範宴と名乗る。

比叡山をおりて、六角堂に参籠し法然の門に入る。

専修念佛が停止され、親鸞は越後に流される。(承元法難)

流罪を許される。

この年、常陸へおもむく。下妻の境ノ郷から稻田へ移る。

親鸞と家族、この年前後に帰洛し、五条西洞院に住む。

火災に遭い押小路南万里小路東の善法坊に移る。

関東へ使者として派遣した息・善鸞を義絶する。

善法坊にて示寂。

【資料】  
①『親鸞聖人惣御門弟等交名』(光照寺蔵、ルビは略す、原本は一行で記す)

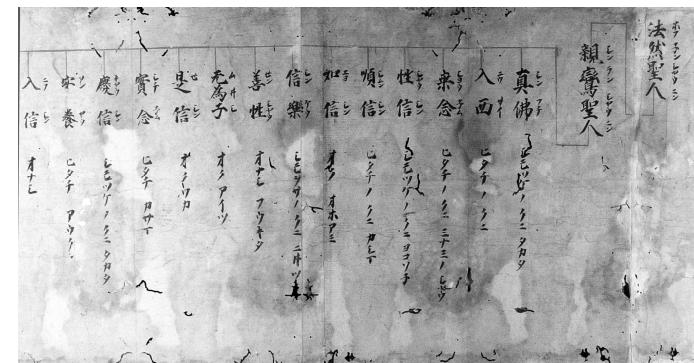
## 親鸞聖人

真仏	シモツケノクニ	タカタ
入西	ヒタチノクニ	
乗念	ヒタチノクニ	ミナミノシヤウ
性信	シモツケノクニ	ヨコソ子
順信	ヒタチノクニ	カシマ
如信	オクワカ	
信楽	オクワカ	
善性	オクワカ	
無為	オクワカ	
子	オクワカ	
是信	オクワカ	
實念	オクワカ	
慶信	オクワカ	
安養	オクワカ	
入信	オクワカ	

真仏	シモツケノクニ	タカタ
入西	ヒタチノクニ	
乗念	ヒタチノクニ	ミナミノシヤウ
性信	シモツケノクニ	ヨコソ子
順信	ヒタチノクニ	カシマ
如信	オクワカ	
信楽	オクワカ	
善性	オクワカ	
無為	オクワカ	
子	オクワカ	
是信	オクワカ	
實念	オクワカ	
慶信	オクワカ	
安養	オクワカ	
入信	オクワカ	

真仏	シモツケノクニ	タカタ
入西	ヒタチノクニ	
乗念	ヒタチノクニ	ミナミノシヤウ
性信	シモツケノクニ	ヨコソ子
順信	ヒタチノクニ	カシマ
如信	オクワカ	
信楽	オクワカ	
善性	オクワカ	
無為	オクワカ	
子	オクワカ	
是信	オクワカ	
實念	オクワカ	
慶信	オクワカ	
安養	オクワカ	
入信	オクワカ	

(以下、東国門弟二一名



【東国門弟】  
常陸国一八名  
下野国六名  
下総国三名  
陸奥国五名  
武藏国一名  
越後国一名  
不明一名  
合計三五名

②『親鸞消息』(『広本』八 「推定建長七(一二五五)」一二・廿六付) 教忍御坊宛 (70) さては、この御たずねそらうことは、まことによき御うたがいどもにてそらうべし。 まず、「一念にて往生の業因はたれり」ともうしそうらうは、まことにさるべきことにて そうらうべし。さればとて、一念のほかに念佛をもうすまじきことにはそらわす。その ようは『唯信鈔』にくわしくそらう。よくよく、御覧そらうべし。

③『親鸞消息』(『広本』一四 建長八(一二五六・五・廿八付) 覚信御房宛 (29) 四月七日の御ふみ、五月廿六日たしかにたしかにみ候いぬ。さては、おおせられたる事 信の一念、行の一念、ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる 信の一念もなし。(中略) あなかしこ、あなかしこ。

④『親鸞消息』(『広本』一五 「推定正嘉二(一二五八)」十・廿付) 浄信御房宛 (61) たずねおおせられて候う事、かえすがえすめでどう候う。まことの信心をえたる人は、す でに仏にならせ給うべき御みとなりておわしますゆえに、如来とひとしき人と経にとかれ 候うなり。

⑤『親鸞消息』(『善性本』四 「推定正嘉一(一二五七)」十・六付) しのぶの御房宛 (一) たずねおおせられてそらう攝取不捨の事は、『般舟三昧行道往生讃』と申すにおおせら れて候うを、みまいらせ候えば、「釈迦如来・弥陀仏、われらが慈悲の父母にて、さまざま の方便にて、我等が無上信心をばひらきおこさせ給う」と候えば、まことの信心のさだ まる事は、釈迦・弥陀の御はからいとみえて候う。

⑥『親鸞消息』(『善性本』七の口 「推定正嘉年間(一二五七・五九)」十一・十八付) 専信御坊宛 (48) おおせ候うところの往生の業因は、眞実信心をうるとき攝取不捨にあずかるとおもえ、 かならずかならず如來の誓願に住すと、悲願にみえたり。「設我得仏 国中人天 不住定 聚 必至滅度者 不取正覺」(大經) とちかい給えり。

⑦『親鸞消息』(『末灯鈔』一〇 「推定正嘉八(正元年間)」五・五付) しょうしんの御ぼう宛 (4) 御ふみくわしくうけ給わり候いぬ。さては、ごほうもんのごふしんに、一念發起信心のと き、無碍の心光にしようせられまいらせ候うゆえ、つねに淨土のごういん決定すとおお せられ候う。これめでたく候う。

⑧『親鸞消息』(『末灯鈔』一二 「推定正嘉元(一二五七)」七・十三付) 有阿弥陀仏宛 (二) 御たずねおおせられそらう念仏の不審のこと。念佛往生と信ずるひとは、辺地の往生とて きらわれそらうらんこと、おおかたこころえがたくそらう。そのゆえは、弥陀の本願 ともうすは、名号をとなえんものをば極樂へむかえんとちかわせたまいたるを、ふかく信 じてとなうがめでたきことにて候うなり。信心ありとも、名号をとなえざらんは、詮な く候う。また、一向、名号をとなうとも、信心あさくは、往生しがたく候う。

⑨『親鸞消息』(『末灯鈔』一八 「推定正嘉元(一二五七)」十一・廿六付) 隨信御房宛 (66) 御たずねそらうことは、弥陀他力の回向の誓願にあいたてまつりて、眞実の信心をたま わりて、よろこぶこころのさだまるとき、攝取してすてられまいらせざるゆえに、金剛心 になるときを、正定聚のくらいに住すとももうす。弥勒菩薩とおなじくらいになるともと かれて候うめり。弥勒とひとつくらいになるゆえに、信心まことなるひとをば、「仏とひ とし」とももうす。

⑩『親鸞消息』(『広本』三 「推定建長四(一二五二)」日付なし) 宛所欠 往生は、ともかくも凡夫のはからいにてすべきことにもそらわす。めでたき智者も、 はからうべきことにもそらわす。大小の聖人だにも、とかくはからわで、ただ願力にま かせてこそ、おわしますことにてはそらうなれ。(中略) さきにくだしまいらせそら いし『唯信鈔』・『後世物語』・『自力他力』なんどの文どもにて、御覧そらうべし。そ れこそ、この世にとりては、よきひとびとにてもおわします。

⑪『親鸞消息』(『血脉文集』二 「推定建長八」五・廿九付)性信房宛(4)

おおかたは、『唯信抄』・『自力他力の文』・『後世ものがたりの書きがき』・『一念多念の証文』・『唯信鈔の文意』・『一念多念の文意』、これらを御覽じながら、慈信が法文によりて、おおくの念佛者達の、弥陀の本願をすてまいらせおうてそうろうらんこと、もうすばかりなくそらえ、かようの御ふみども、これよりのちにはおおせらるべからずそらう。

かたがたよりの御こころざしのものども、数のままに、たしかにたまわりてそらう。かたがたの御明教坊ののぼられてそらうこと、まことにありがたきことにそらう。かたがたの御こころざし、もうしつくしがとうそらう。(明教は33の明法の後継者か)

⑫『親鸞消息』(『広本』一 建長四・八・十九付)宛所欠  
かたがたよりの御こころざしのものども、数のままに、たしかにたまわりてそらう。

護念坊のたよりに、教念御坊より、錢二百文、御こころざしのものたまわりてそらう。さきに、念佛のすすめのもの、かたがたの御なかよりとて、たしかにたまわりてそらう。ひとびとに、よろこびもうさせたまうべくそらう。この御返事にて、おなじ御ころにもうさせたまうべくそらう。(護念坊69、教念御坊46)

⑬『親鸞消息』(『広本』八 「推定建長七」十二・廿六付)教忍御坊宛(70)  
護念坊のたよりに、教念御坊より、錢二百文、御こころざしのものたまわりてそらう。

人々の御こころざし、たしかにたまわりてそらう。なにともなにごとも、いのちの候わんほどは申すべく候う。

⑭『親鸞消息』(『御消息拾遺』二 正応元(一一五九)・閏十・廿九)たかだの入道殿宛(一)  
九月二十七日の御ふみ、くわしくみそらういぬ。さては、御こころざしの錢五貫文、十一月九日にたまわりてそらう。

⑮『親鸞消息』(『御消息拾遺』二 正応元(一一五九)・閏十・廿九)たかだの入道殿宛(一)  
人々の御こころざし、たしかにたまわりてそらう。なにともなにごとも、いのちの候わんほどは申すべく候う。

⑯『親鸞消息』(『広本』一四 「推定建長八」五・廿八)覚信御房宛(29)  
専信坊、京ちかくなられて候うこそたのもしうおぼえ候え。また、御こころざしのせに三百文、たしかにたしかにかしこまりて、たまわりて候う。

⑰『歎異抄』(第二章)  
おののおの十余か国のかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御こころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。

⑱『親鸞消息』(『御消息拾遺』一 「推定建長七」十二・十五付)真仏御房宛(1)  
このえん仏ぼうくだられ候う。こころざしのふかく候うゆえに、ぬしなどにもしられ申さずして、のぼられて候うぞ。こころにいれてぬしなどにもおおせられ候うべく候う。この十日のよ、じようもうにおうて候う。この御ぼう、よくよくたずね候いて候うなり。こころざし、ありがたきようく候うぞ。さだめてこのようは申され候わんずらん。よくよくきかせ給うべく候う。(えん仏ぼう一)

⑲『親鸞消息』(『血脉文集』四 「推定推定建長八」九・七付)性信御房宛(4)

武藏よりとて、しむの入道どのともうす人と、正念佛ともうす人の、京都大音院王番にのぼらせたまいでそらうとて、おわしましてそらう、みまいらせてそらう。御念佛の御こころざしをおわしますとそらえ、ことにうれしうめでたうおぼえそらう。(しむの入道75、正念76)

⑳『三河念佛相承日記』

建長八年丙辰十月十三日に、薬師寺にして念佛をはじむ。このとき真仏聖人・顕智聖・専信房<sup>河の矢倒</sup>俗名亦藤五殿<sup>下人</sup>弥大郎男、出家後隨念佛<sup>云々</sup>、そじて主従四人御上洛のとき、やはぎの薬師寺につきたまふ。御下向には、顕智聖は京のみもとに御どうりう、三人はすなはち御くだり。(真仏1、顕智45、専信48)

㉑『親鸞消息』（『広本』一六 「推定建長三」十一・廿五付）真仏御房宛（一）  
他力のなかには自力ともうすることはそうろうとききそうらいき。他力のなかにまた他力と  
もうすることはききそうらわす。（中略）なにごとも、専信坊のしばらくいたらんとそらえ  
ば、そのときもうしそうろうべし。

㉒『慶信消息』（『善性本』忽忽の① 「推定正嘉二（一一五八）」十・十付）親鸞聖人宛  
京に久しう候いしに、そなうにのみ候いて、ころしづかにおぼえず候いし事のなげか  
れ候いて、わざといかにしても、まかりのぼりて、ころしづかに、せめでは五日、御所  
に候わばやとねがい候うなり。（慶信13）

㉓『親鸞消息』（『善性本』一四 「推定建長八」五・廿八付）覚信御房宛（29）  
四月七日の御ふみ、五月廿六日たしかにたしかにみ候いぬ。さては、おおせられたる事、  
信の一念、行の一念、ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる  
信の一念もなし。（中略）あなかしこ、あなかしこ。  
いのち候わば、かならずかならずのぼらせ給うべく候う。

五月二十八日 （花押）

覚信御房御返事

㉔『蓮位添状』（『善性本』一）の二 「推定正嘉二」十・廿九付）慶信御坊宛（13）

そもそも、覚信坊の事、ことにあわれにおぼえ、またとうとくもおぼえ候う。そのゆえは、  
信心たがわすしておわられて候う。またたびたび、信心ぞんじのよう、いかようにかと、  
たびたびもうし候いしかば、「當時までは、たがうべくも候わづ。」一日市よいよ信心のようは  
つよくぞんずるよし候いき。のぼり候いしに、くにをたちてひといちともうししとき、  
やみいだして候いしかども、同行たちはかえれなんどもうし候いしかども、「死するほど  
のことならば、かえるとも死し、とどまるともやみ候わんず。また、やまいはやみ候わば、  
かえるともやみ、とどまるともやみ候わんず。おなじくは、みもとにてこそおわり候わば  
おわり候わめとぞんじて、まいりて候うなり」と、御ものがたり候いしなり。この御信心、  
まことにめでたくおぼえ候う。（一日市を細川行信氏は埼玉県吉川市に比定される）

㉕『口伝鈔』（六条）

一 信のうえの称名の事。

聖人 親鸞の御弟子に、高田の覚信房 太郎入道と号す。というひとありき。重病をうけて御坊中にして獲麟にのぞむとき、聖人 親鸞 入御ありて危急の体を御覧ぜらるるところに、呼吸のいきあらくして、すでにたえなんとするに、称名おこたらず、ひまなし。そのとき聖人たずねおおせられてのたまわく、「そのくるしげさに、念佛強盛の条、まづ神妙たり。ただし所存不審、いかん」と。覚信房こたえもうされていわく、「よろこび、すでにちかずけり。存ぜんこと、一瞬にせまる。刹那のあいだたり」というとも、いきのかよわんほどは、往生の大益をえたる仏恩を報謝せずんば、あるべからずと存ずるについて、かくのごとく報謝のために称名つかまつるものなり」と云々 このとき上人、年來常隨給仕のあいだの提撕、そのしるしありけりと御感のあまり、隨喜の御落涙、千行万行なり。

【注】1、「親鸞消息」の推定年次は多屋頼俊『親鸞書簡の研究』（法藏館）による。

2、「親鸞消息」などの関東門弟名に付した数字は5頁の図の数字に対応している。

正嘉 二	正嘉 元	建長 八	建長 七	建長 六	建長 二	寛元 四	仁治 二	文暦 二	寛喜 二	和暦
一一五八	一一五七	一一五六	一一五五	一一五四〇	一一四五	一一四六	一一四一	一一三五	一一三〇	西暦
八六	八五	八四	八三	八二	七八	七四	六九	六三	五八	年齢
『一念多念文意』 (この年以前)	『唯信鈔文意』 (十月十六日)	『唯信鈔文意』 (後世信物語聞書) (隆寛)	『唯信鈔文意』 (唯世信物語聞書) (隆寛)	執筆年次						

【関東門弟へ送付した聖教の執筆年次と書写一覧】

常陸  
2入西・3乗念・5順信  
8慶西・12寔念・14安養  
15入信・16念信・17乗信  
18唯信・19慈善・20善明  
21唯円・22善念・23頼重  
31法善・33明法・34証信  
46教念・49証善・51定信  
52道円・53入信・54唯仏  
55唯信・56唯円・61淨信  
62承信・63教名・66隨信  
70教忍・71真淨・73中太郎  
下総  
4性信・7信樂・9善性  
30常念・69護念  
下野  
1真仏・13慶信・24信願  
29寔信・36尼法仏・45顕智・50証性・60高田の入道  
武藏  
32西念・75しむの入道  
76正念

奥州  
6如信・10無為子・11是信・25本願・26唯信・28唯仏・47覚円・67明教  
不詳(東國)  
35西願・57円仏・58寔念  
59寔然・64哀愍・65有阿弥陀仏・68平塚の入道  
72法信・74源藤四郎  
越後  
27寔善  
遠江  
48專信  
京都  
37尊蓮・38宗綱・39尋有  
40兼有・41蓮位・42賢阿  
43善寔・44淨信

武藏  
[75・76]

●真仏報恩塔

## 親鸞直弟子の分布



『真宗新辞典』(法藏館) より